近代化のなかで見失った文化を伝えたい！

食農ネット副代表委員からのメッセージ

効率化してはいけない〝まなざし〟

農と自然の研究所代表理事　宇根　豊

食農教育は、子どもばかりが対象ではない。当の百姓が、教師が、失ったものを発見することにもなるからおもしろい。

百姓は言う。「いまどき、子どもに仕事を手伝わせる職業はない」と。そうかもしれない。それなら、「農家の子どもの大多数が、小学校の農業体験学習で、生まれて初めて、田植えを体験する」という現実を、容認するのか。たしかに子どもに手伝わせると、かえって効率は落ちるかも知れない。近代化技術とは、そういうものだ。

しかし、ほとんどのカリキュラムが、田植機の運転ではなく、前近代的な「手植え」を採用している理由は、明白ではないか。自然に働きかける百姓仕事の、核心が伝わりやすいのは、手植えのほうだ。数百年かけてきた「土づくり」の成果を、ぬるぬるした感触から、一挙に感じとれる体験が、ほかにあるだろうか。稲とともに、オタマジャクシやゲンゴロウやトンボが育つことを、まのあたりにする体験は、すごいことなのだ。

人間の労働時間は短縮できるかも知れないが、生きものの生はスピードアップできない。オタマジャクシは、三〇日経たないと、カエルになれないのだ。つまり、生きものを育てる仕事は、効率化してはいけないことを、実感しておくことの意義は大きい。

あえて、最後の日は家族そろって、一畝でも手植えをして、田植えをうち上げる。そういう生き方を、百姓が自ら示すひとときが、食農教育の真骨頂ではないか。（著書『田んぼの学校入学編』農文協刊、他）

伝統的智恵を学び続ける

東京学芸大学教授（民族植物学・環境教育学）　木俣美樹男

最近、欧米の研究者たちから知識体系には二種類があることに気づかされた。地域での自らの体験に基づく伝統的智恵と教師から伝達された科学的知識の体系である。日本の学校教育では科学的知識の体系を中心に教え、科学技術や都市を栄えさせてきた。しかし一方で、家庭や地域社会を支えてきた伝統的智恵の体系は伝承できなくなり、工芸技能や農山村は衰退させられてきた。日本の教育はこれでほんとうによかったのだろうか。高齢化に向かうなかで日本の伝統的智恵の体系を身につけた古老たちはいよいよ彼岸に召され、少子化／IT化に向かうなかでますます体験的に学ぶ機会が少なくなり、伝統的智恵は体系を失って伝承できなくなる。今こそ、どうか親たち、大人たちは学力低下論などに惑わされず、教育の不易の本質や根底はどこにあるのかをしっかりと見極めてほしい。

人間は動物であるが、農耕文化に支えられている。他の生物種を育て、殺して、食べることなしに生きていくことはできない動物でありながら、人間はこの行為に罪業と感謝の精神性をもつ存在でもある。この意味で、農耕と食事は環境学習の基層であるといえる。伝統的な、地域固有の生物文化多様性を保全、再創造し、とりわけ雑穀など畑作物在来品種の種子とこれをめぐる農耕文化基本複合を合わせて保存するシードセーバーズも食農教育ネットワークにおいて重要な役割をもつだろう。（著書『持続可能な社会のための環境学習』共編、培風館刊、他）

「人間が生きることの原点」を次代に伝える

上越教育大学教授（学校教育・カリキュラム論）　小林　毅夫

拾い集めた杉の葉を焚きつけにして飯を炊き、一つの炎の下に家族全員が集って語り合う日常のくらしを知っている世代。そして、電子レンジであっという間に飯が炊け、暖房のきいた部屋で、世界の人たちとネットで対話できる生活を享受している世代。原始に近い生活から技術革新で極めて便利になった現代生活までを経験してきた「人類始まって以来のユニークな世代」（木村治美氏）も次第に少数派になりつつある。このユニークな世代である私たちは、人間が失ってはならないものを伝えていく責任がある。

食農教育は、次の世代を担う人たちに「人間が生きることの原点」を伝えていく最もふさわしい場であり、方法である。生産の苦労、収穫の喜びなど、「食べる」ことにかかわる原初的な体験を通して、「豊かさとは何か」「便利さの陰で失ってきたものはないか」等について考えさせることができる。身体の奥深くに響く感性・情念と結びつきながら、これまで机の上で学んできた知識や技能の意味を改めて問い直し、自らの力で「知」を創り出していく絶好の機会となる。

食農教育の重要性に気づいて、実践を積み重ねてきた多くの人たちがいる。その熱き思いを一つに結びつけ、互いに連携し合いながら、運動の輪を大きくしていきたい。

（著書『小学校学習指導要領の展開　総合的学習編』共編著、明治図書刊、他）

差異をいかした、多様性をもった交流を！

宇都宮大学農学部教授（地域経済論）　守友　裕一

食、農、教育、この三つの重要性について否定する人はほとんどいないでしょう。

農業者は農業生産やそれと密接に関係する地域環境の保全・創造という点から、消費者は安全で安心でき、由来がわかり納得できる農産物、食への期待から、子ども・親・教師は力を合わせて豊かな未来をつくっていくために、それぞれの立場から様々な意見を持っていると思います。

しかし今日の複雑化する社会のなかで、それぞれの立場の異なった意見を相互に聞いて、交流する機会は十分にあるといえるでしょうか。

このたび立ち上げる「食農教育ネットワーク」は、全国各地でこの重要な三つの課題について実践し、研究し、普及し、教育している方々が、それぞれの意見を持ち寄り、相互の差異を認めあいつつ交流し、これからの食、農、教育のあり方についてネットワークをつくって、考えていこうというものです。

この新しい試みに多くの方が参加してくださることを期待しております。

（著書『内発的発展の道』農文協刊、他）

農文協　定期購読受付中

生きる力を育む教育雑誌

食文化活動

年2回　定価400円　年間購読料800円

★地域に根ざす食育の活動交流誌。食を軸に、領域を越えた健康・福祉・教育の地域連携活動を推進。A5判

2005年3月号
地域に根ざした食育コンクール2004
食育実践活動　受賞事例集　農林水産省の提唱で優良な食育実践活動を顕彰するコンクール。2004年度の受賞結果と活動内容の紹介。

保健室

隔月刊　定価700円　年間購読料4800円

★保健室だから見える、教室ではわからない子どもたちの本当の姿。養護教諭からの発信。A5判　編集・全国養護教諭サークル協議会

4月号　子どもが行きたい保健室
2月号　世界にはばたくYogo Teacher
12月号　知らないと恐いケータイ・ゲーム脳
10月号　からだ・命を守る「食」

技術教室

月刊　定価720円　年間購読料8640円

★「ものづくり」から社会や生活を見つめ、生きる力を育てる教育を追究。日本唯一の技術・家庭科専門誌、A5判　編集・産業教育研究連盟

4月号　授業を創る舞台裏
3月号　総合学習に活きる技術・家庭科
2月号　エネルギー変換で何を学ぶか
1月号　ヴァーチャル時代と情報教育

初等理科教育

月刊　定価700円　年間購読料8400円

★実践例豊富な小学理科の総合専門誌。子どもの理科離れに危機感をもつ仲間たちの情報交流。B5判　編集・日本初等理科教育研究会

4月号　ふるさとの自然に自信と誇りを育てる授業
3月号　個の学びを生かした練り上げのある授業
2月号　豊かな「挫折」がある授業
1月号　自然を豊かに感じ、確かな科学を築く

ご注文は　農文協〒107-8668　東京都港区赤坂7-6-1　☎03(3585)1141　FAX.03(3589)1387　URL=http://www.ruralnet.or.jp/　価格は税込